２００８年度　広島経済大学懸賞論文

現在の子どものコミュニケーションのあり方
～現代社会が奪った会話～

広島経済大学　経済学部　ビジネス情報学科
1714013　米田直樹

論文要旨

この論文では、現在の子どもたちに欠けたコミュニケーションの原因について考えている。

論文の前半では、コミュニケーションの発達について乳児期、幼児期、児童期、青年期に分けて、それぞれの発達段階に分けてコミュニケーションの発達にはどのような違いがあり、子どもたちと保護者、教師がどのように接していけばよいのか紹介している。

論文の後半では、子どもたちのコミュニケーションが欠けた原因について、教育現場、携帯電話、インターネット、ゲーム、家庭環境を例にあげて考えている。子どもたち（のコミュニケーションの欠乏や子どもたち）が話さなくなったのはこれらが原因になっているのではないのか。今の子どもたちが自分の気持ちを思うように表現できなくなってしまった生活環境について分析している。

論文の最後のほうでは筆者が考える理想のコミュニケーションについて述べている。ここでは、読者（特に保護者、教師）に真剣に子どもたちのコミュニケーションの発達について考えてもらいたいと思っている。

今日の情報社会では会話をしなくても容易にコミュニケーションが取れるようになってしまった。だからこそ筆者は、子どもたちに、友人や家族や人と、機械を通してではなく、顔を合わせて話すということの大切さや、会話の楽しさ、仲間のできる喜びを理解してもらえるようになってもらいたいと考えている。以上のように、この論文では、生きる力には不可欠なコミュニケーションというものを通して子どもたちの将来について真剣に考えていこうと思う。

目次

第１章　はじめに 1

第２章コミュニケーションとは？ 2

第１節コミュニケーションの意味 2

２－１　乳児期（誕生～一歳半ないし二歳） 2

2－2　幼児期　（２歳～６歳） 3

2－3　児童期　（６歳～１２歳） 3

2－4　青年期（１２歳～？） 3

第３章　教育現場と家庭でのコミュニケーション 4

第１節 教育現場でのコミュニケーション 4

1－1　ゆとり教育とは 4

1－2　ゆとり教育の影響 5

1－3 先生と子どもの関係一教師の役割とは？ 5

第２節 家庭でのコミュニケーション 6

2－1　携帯電話がもたらした影響 6

2－2 インターネットがもたらした影響 7

2－3　遊び方今昔 8

2－4　核家族化による影響 8

第4章　おわりに -理想とするコミュニケーション- 9

参考文献 11

第1章　はじめに

筆者はこの論文により今日の日本でのコミュニケーション不足の現状とそれに対するコミュニケーションの必要性をより多くの人に理解してもらいたいと思い執筆することとする。この論文を通して、人と人との会話の楽しさや、理解しあえる喜びを読者に分かってもらいたい。筆者がこのように思うようになったのは、4 年間の大学生活を通して、たくさんの人々と出会ったことが一番の理由である。より多くの人々と関わることが、自分自身の成長に大きく影響を及ぼしていると感じ、人との出会いが大切なものであると思うようになったのである。たくさんの友人ができから、たくさん話し合うことができた。人と理解し合えるということは、自分自身もそして相手も共に成長できる。コミュニケーションが大切だということが理解されているのにもかかわらず、この能力が不足しているということに疑問を感じた。この論文で読者が少しでもコミュニケーションの大切さに気づくきっかけになれば良いと思う。

我々が何気なく話している言葉。言葉は他の生物にはない独特のコミュニケーションである。動物は自分の気持ちを鳴き声や行動でしか表すことができない。しかし人間は、それに加えて言葉というものをも使用できるということがすばらしいことだと思う。この優れた言葉という武器を有効に使わずに人生を終えるのはもったいない。だからこそコミュニケーションがうまくいくように自分は何をしていけばいいのか。自分自身もコミュニケーションの大切さをより深く知るためにこの論文を執筆していこうと思う。

この論文では、第 2 章でそもそもコミュニケーションとは何かということを説明する。そして、人の発達段階によるコミュニケーションの形成のされかたの違いについて詳しく紹介していこうと思う。

第 3 章ではコミュニケーション不足の原因となっているものを教育現場と家庭環境の大きく二つに分けて述べようと思う。そして、コミュニケーションの不足から起きているさまざまな現象を解析していこうと思う。

これらをもとに第 4 章では、根本的にコミュニケーションの何が、現代の子どもたちに欠けているのかを分析をしてみる。

最後に理想とされるコミュニケーションとは何かを考え、この論文の執筆を通して、感じたことや我々が考えていかなければならないことを述べようと思う。そして、それらから子どもたちのコミュニケーションの必要性について、読者が真剣に考えていただけるような機会になれば幸いである。

第２章コミュニケーションとは？

第１節コミュニケーションの意味

コミュニケーションにおいては、これまでにも様々な考え方が紹介されてきている。そこでまず簡単にコミュニケーションというものを大きく三つにわけて紹介する。

一つはマスコミュニケーションである。マスコミュニケーションとは個人または不特定多数の対象が、受け手と送り手を区別されず相互に情報を伝達することが可能な状態のことをいう。二つ目は個体内コミュニケーションといい、人が自分で決めて、自主的に働きかけていくことをいう。三つ目は対人コミュニケーションである。この対人コミュニケーションとは、人と人のあいだの情報のやりとりのことをいう。この論文では主に対人コミュニケーションのことについて執筆しようと考えている。よって、ここでは対人コミュニケーションのことに重点を置いて述べようと思う。

対人コミュニケーションは、人と人が話をすることや聞くことのみではなく、お互いが理解し合うことが大切である。このコミュニケーションは、会話だけではなく、表情や視線が関係している。例えば乳児期の子どもは、お腹がすいたときにどうやって親に知らせるか考えてみよう。大半の子どもは泣いて親を呼んで辛い表情をするだろう。そして、これを親が察知した時が、一つの対人コミュニケーションが成立した時である。また、身振り手振りだけを使って表現（ジェスチャー）し、理解しあうこともまた、対人コミュニケーションのひとつである。

視聴覚障害等で会話が容易にできない人たちもいる。その人たちはどのようにしてコミュニケーションをとっているのか。例えば聴覚障害を持っている場合であれば、手話や筆談が挙げられる。また、手の動きと口の動きと表情で会話をしていることもよく見受けられる。そして、視覚障害を持っている人々は、点字やテープレコーダー、実際に会話することや、触れ合うことでコミュニケーションをとっている。これらはみな、対人コミュニケーションであるといえる。このように対人コミュニケーションには本当にさまざまなものがある。

第2節　コミュニケーションの形成

コミュニケーションの形成は人が成長する段階によって異なる。ここでは、乳児期・幼児期・児童期・青年期に注目してそれぞれの発達段階によるコミュニケーションの形成の違いについて述べる。

２－１　乳児期（誕生～一歳半ないし二歳）

この時期の特徴は養育者に全面的に保護された中での発達ということにある。この時期に養育者との間に形成される強い情緒的なつながりは、その後の情緒や人間関係の発達に

重要な影響を与えるといわれている。

乳児期の子どもは、言語や意識が十分発達していないため、本能による行動を示し欲求不満や抑圧された感情、外傷体験などがエディプスコンプレックス（母親を確保しようと強い感情を抱き、父親に対して強い対抗心を抱く心理状態の事）として無意識の領域に押し込まれるおそれがある。そうした中で、最近若い母親の乳児の泣き声による識別能力の低下が指摘されている。このような非言語時期のコミュニケーションの弊害は「規律と社会適応、共感や癒しの能力の欠如」につながるということも指摘されている。

2－2　幼児期　（２歳～６歳）

幼児期に入ると子どもたちの生活には、大きな変化が訪れる。それは、養育者に見守られた生活を送ることには変わりがないが、それに加えて、自立を目指した生活が始まるのである。

幼児期の前半においては、基本的な生活習慣（睡眠、食事、排泄、衣服の着脱、清潔）などに関する「しつけ」を養育者はしっかりしておかなければならない。また、この時期の子どもは、好奇心が旺盛で神経回路の発達についても、体験学習や外界からの刺激の多少によっても、その発達度合いが決まるという大事な時期でもある。

幼児期の後半においては、近所の遊び仲間や幼稚園、保育園での仲間・集団との接触を通して、「社会化」が開始される。この時期の子どもは、発達段階の中では比較的心理的には安定した状態にあると考えられている。

2－3　児童期　（６歳～１２歳）

この時期の特徴は学校生活の開始である。義務教育という長く続く、特筆すべき時期である。

１．物事を客観的に見る能力、知的好奇心、知的吸収力などそれまで培ってきた認知能力を基礎に勉強への取り組みが始まる。

２．仲間とのやりとりを通して、社会的な技能を修得する。子どもたちが大人から独立した子ども世界を形成するのは、この時期以降である。

３．学校生活の中では、多くの仲間と巡り会うとともに、自分を発見する場でもある。様々な活動に取り組み、それらの経験を通して子どもたちが自分は何をしたいのか、何者になりたいのか、やりたいことに気づいて、それを伸ばしていくことが期待される時期である。

2－4　青年期（１２歳～？）

身体的な変化としては第二性徴の開始、心理的な変化としては第二反抗期と見なしている。中学生にあたる時期は、青年期前期（思春期）、高校性・大学性に当たる時期は青年期後期と呼ばれる。

青年期は、元々は子どもでなく、大人でもなく中間的な段階、過渡的な段階と位置づけられてきた、ところが文明社会においては、身体的な発育が進んで、青年期の開始が早くなる一方、一人前の大人になる為には様々な経験が必要とされることから成人になる時期が遅くなり、全体として青年期は引き延ばされる傾向にある。

第二性徴の時期が早まっているだけに、時間的な展望の中で自分を受け入れ、社会の一員として自分を位置づけていくことがこの時期の重要な課題と考えられている。

このように、コミュニケーションとしての発達というのは、発達段階や年齢によってそれぞれ異なっているということが分かる。

第３章　教育現場と家庭でのコミュニケーション

第１節　教育現場でのコミュニケーション

1−1　ゆとり教育とは

平成８年７月１９日の中央教育審議会(※1)答申「２１世紀を展望した我が国の教育の在り方について」のなかの「これからの学校教育の在り方」の一節に下記の文章が記されている。《これからの学校の目指す教育としては、生きる力の育成を基本とし、知識を一方的に教え込むことになりがちであった教育から、子どもたちが、自ら学び、自ら考える教育への転換を目指す。そうした教育を実現するため、学校はゆとりのある教育環境でゆとりのある教育活動を展開する。そして、子どもたち一人一人が大切にされ、教員や仲間と楽しく学びあい活動する中で、存在感や自己実現の喜びを実感しつつ、生きる力を身につけていく。》 ゆとりを持った学校教育を謳いだしたのは昭和５１年の教課審課程審議会（※2）の答申にさかのぼる。その後、教育課程審議会、中央教育審議会の答申の随所にゆとりを持った学校教育の実現が謳われている。特に、平成１４年から本格実施された「新教育課程」では、ゆとりという言う言葉が頻繁に使われている。(「ゆとり教育とは」より引用)

学校週５日制については、平成４年９月に月１回の学校週５日制が導入され、平成７年４月に月２回の学校週５日制が実施に移されるという形で段階的に進められ、これまでおおむね順調に実施されてきた。これらの実施の経過を通じ、学校での取組や子供の学校外活動の場や機会などの条件整備の進展とともに、これまでのところ全体として学校週５日制に対する保護者や国民の理解は深められてきたと考えている。学校週５日制のねらいである、子どもたちにゆとりを確保し、生きる力をはぐくんでいく上で妨げの一つとなるものとして、過度の受験競争の問題がある。また、月２回の学校週５日制を導入した段階では、休業土曜日について、通塾率について大きな変化はないものの、完全学校週５日制を導入する際には、塾通いが増加するのではないかとの懸念がある。学校週５日制は、子どもたちの家庭や地域社会での生活時間を増し、子どもにゆとりを確保し、家庭や地域社会での豊富な生活体験・社会体験・自然体験の機会を与えようとするものである。(文部科学

省ＨＰより引用）

※１中央教育審議会＝教育の理念・目的・制度・方向性等について文相の諮問に対し答申する機関。文部省からは独立した機関であるが、委員は文部官僚が指名するので、実質は文部官僚の方向性と一致する。

※２教育課程審議会＝学校教育の目標・内容・方法等に関する「教育課程の基準」に関する答申を行う機関。

1－2　ゆとり教育の影響

ゆとり教育政策は、昭和５１年以降、公教育は荒廃の一途をたどっている。“子どもたちを 過酷な受験地獄から守る。詰め込み教育が子どもたちを地獄に追いやっているので、偏差値を廃止し、ゆったりと楽しい学校と勉強を楽しいものにする。”このような発想で文部省は「ゆとり教育」を取り入れた。

しかし、結果は校内暴力の激化、いじめ、不登校、学級崩壊、そして学力低下等公立学校の荒廃は目に余るものがある。そしてそれは、ゆとり教育を進めた年あたりから急激に増加していることが明らかにされている。

1－3 先生と子どもの関係一教師の役割とは？

就学するまでの子どもは家庭を生活の場とし、親子関係というタテの人間関係から文化を受け継ぎ、行動の基準を教えられ、兄弟関係というヨコの人間関係から主として情緒や社会性の発達を学ぶ。

小学校に入学した子どもを取り巻く人間関係は、教師と生徒というタテの人間関係と友人というヨコの人間関係との二重の関係であり、子どもは、その中の一員となる。一年生ではこのような人間関係の変化になれることが、学校生活での適応の中心となる。一年生にとって教師は、教師としてよりもむしろ年長の遊び相手、あるいは生活の援助者として見られている。つまり親の代行者としての役割が多い。

二年生になると、一般に幼児期から児童期に移りかけることで、教師を学習の指導者、生徒指導における訓育者として意識してくれるようになる。

三年生は学校生活にも慣れて、本格的に児童期としての特徴をあらわす。二年生と同様教師への親和的な態度、愛着的な態度がきわだち、教師を素直に受け入れる時期である。

四年生は社会意識や集団意識が発達し、教師の手を離れて自主的な活動ができるようになるじきである。そのため対人関係を正確にとらえられるようになり、教師に対して批判的傾向が強くなってくる。

五・六年生は、自己中心的な思考を脱却する時期で、成人なみの思考が可能になってくる。教師に対しても批判的能力が増してくる反面、肯定的になりうる時期でもある。

中学生は、青年期に入ってゆく時期でもあるので種々の点で動揺が見られる。したがっ

て、教師に対する批判的態度にも深さを増し、同様に教師との人格的な交わりが始まる時期である。

高校生は、自我の目覚めの時期で、友人関係の重要性が増し、教師に対しても人生観、世界観を問いかけてくることが多くなる。

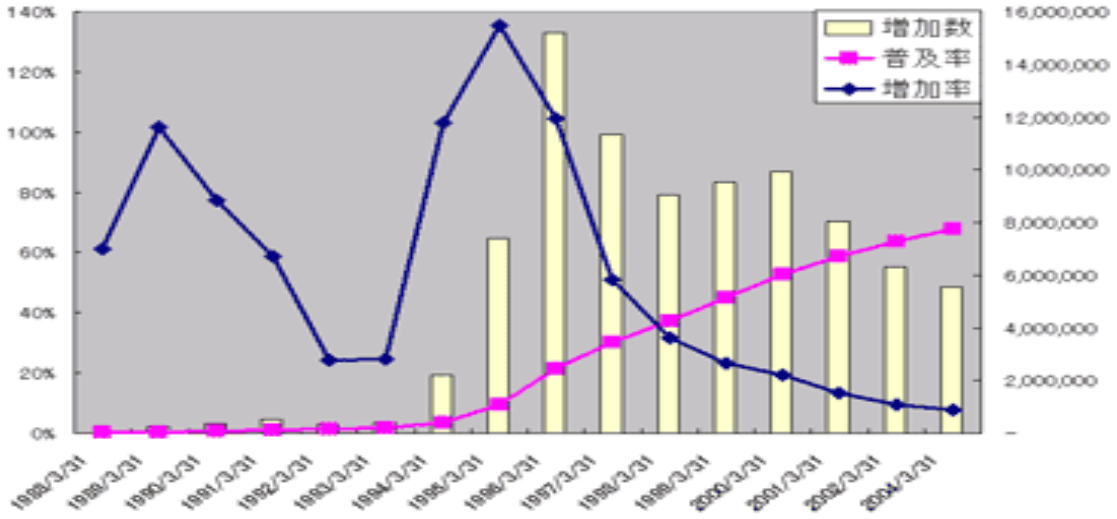
そこで教師の役割とは何か。教師は成長しつつある未成年者の精神に働きかけその発達に継続的な影響を及ぼす役割を果たす。そんな中で教師に必要なものは教育に対しての熱意があり、使命感があること。教化的学力があること。子どもの発達過程を大切にすることなどである。

第 2 節　家庭でのコミュニケーション

2－1　携帯電話がもたらした影響

今日では携帯電話を所持することは当たり前といっても過言ではないほど、携帯電話の普及率は増加傾向の時代になっている。

《日本の携帯普及率》



（http://www.itmedia.co.jp/survey/0404/28/svc10.html より引用）

上記のグラフにあるように、携帯電話は日本では一人に一台と迫るほどの勢いで普及率が伸びている。そんな携帯電話がコミュニケーションとどのような関係があるのか。現在、携帯電話にはさまざまな機能が搭載されている。電話、メールのみでなくインターネット、カメラ、音楽、ゲームなど携帯電話一台でさまざまなことができる。キッズ携帯といった、子ども専用の携帯電話も登場しているほどである。

（図１）

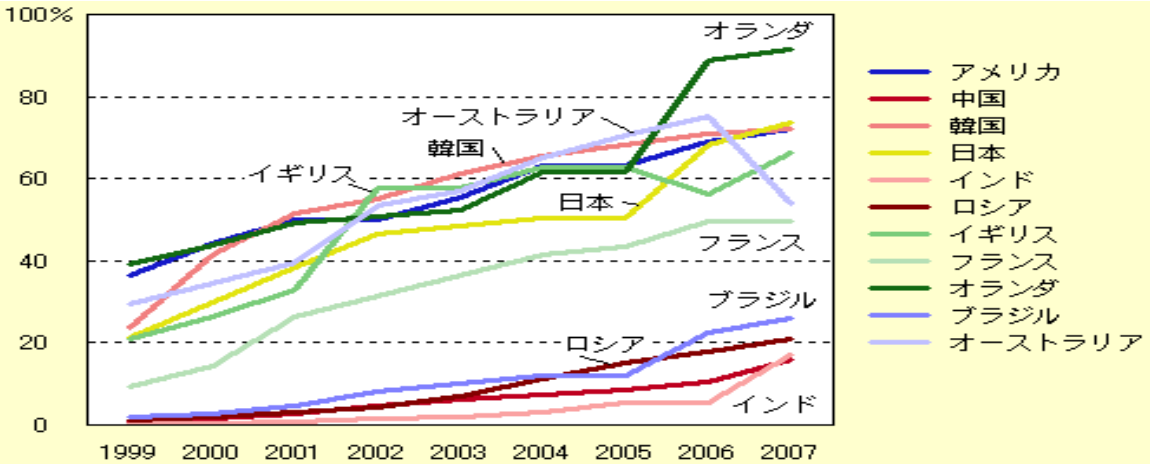
子ども専用の携帯電話は、電話、メールに加え防犯ブザーや、居場所がすぐ分かるように GPS 機能も付いている。この携帯電話は、子どもを守るため、親が安心するためといって子どもに持たせるケースが増加している。こういったメリットと裏腹に子どもたちは、

携帯電話を眺める時間が増えている。つまり携帯電話の普及により友達や家族との会話の時間を奪ってしまっているという現状が起きている。子どもたちがメールやチャットといったバーチャルな世界で会話することによって子どもと親、子どもと教師、子ども同士の会話の数が減少しているのだ。それゆえ、実際に相手を目の前にして話すというときに、苦手意識をもってしまう。人間には相手の気持ちを言葉のみならず、顔の表情や行動からも読み取ろうとする能力が幼いころから備わっている。(第２章　2－3 児童期を参照) それに対して、人格を形成する大切な時期から、人と接する時間が削減されることにより、その能力がうまく成長しきれないまま成人になっていくということになるからである。IT 社会になって豊かになった反面、起きてしまったのがコミュニケーション不足である。また携帯ゲームも子こどもたちの孤立を図ったものがある。

2－2 インターネットがもたらした影響

インターネットもまたコミュニケーション不足の原因になっているのではないかと筆者は考える。インターネットの普及率は全世界で急速に伸び続けている日本は 70%近くとい

《世界のインターネット普及率》



(http://www.infonet.co.jp/ueyama/ip/internet/inet_dif_trns.html より引用)

った高水準となっている。

インターネットがなぜ、コミュニケーション不足の原因になっているのか。インターネットには、携帯電話同様さまざまなサービスが提供されている。インターネットサービスには、どのようなものがあるのか。ヤフーやグーグルといったサイトの検索サービス、ミクシィのような SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービスの略）やショッピング、YouTube（ユーチューブ）といった動画配信サービス等、本当に数えきれないサービスがある。これらのサービスが容易に使用できるようになり、子どもが部屋にこもって勉強をする時間が減少した。一人で過ごす時間が増えるに連れて、人と会話する時間も減っているということもある。また、インターネットの中にある学校裏サイト等によるいじめ、登校拒否、犯罪といった件数も増えているもの事実である。

友達と面と向かって会話をするときや遊ぶときに口論になることが多いということが保護者のアンケートにより明らかにされている。勉強時間が減り、子どもたちが親や教師、友達に伝えたいことがうまく表現できない。これらもインターネットの普及や、インターネット使用の低年齢化が原因になっているといえるだろう。

2－3　遊び方今昔

今と昔では遊び方にどのような変化があるのだろうか。昔は、めんこ、おはじき、こま、竹馬、鬼ごっこ、すごろくなど、一人ではできない遊びが多く、また、体力や知力を要するものが多かった。しかし、現在の遊びは、昔ほど何人もの人を必要とせずに、一人でも楽しめるような遊びが増えたのではないだろうか。たとえば、ポータブルゲームは一人で好きなときに好きなだけ、楽しむことができるとても便利な時間つぶしの道具になる。しかしその反面、そこから部屋に引きこもることが多くなるという可能性も考えられる。そこから、家族との会話が減り、一番身近にあるコミュニケーション能力を学ぶ場を、自ら失うことになっている。また、最近では、友達と公園に遊びに行っても、集団でポータブルゲームをしている風景があたりまえのようになっている。

今と昔の遊びで、根本的に異なっているのは、他人を必要とするかそうでないかということが言える。昔の遊びには、自分一人だけではなく、他者(友達)と関わりを持ち、お互いの技を向上させあいながら遊ぶことが多かったのではないだろうか。そして、自分たちで遊ぶことのできる場所や道具を見つけては、がむしゃらにそれに没頭して遊んでいたのではないだろうか。それに比べて、今日の遊びはというと、大人に決められた場所で、大人に与えられたものでないと遊ぶことができにくい状況が生まれている。その理由としては、現代が、昔よりも犯罪が多くなったことも挙げられるかもしれないが、やはり、遊び道具の変化も大きな要因であるといえるだろう。大人に与えられた条件の中で育つと、思考力や表現力の低下につながる。すなわち、相手にうまく気持ちを伝えようだとか、次は何をすればよいだろうかということを、自分自身で考える力の育成を妨げることになるのである。

2－4　核家族化による影響

今日、工業化や産業構造の転換、都市への人口移動によって、家族の形態は、大家族から核家族化へと変貌した。これによって、コミュニケーション不足にどのように影響があるのか。現在、家庭の教育機能の低下がよく言われている。家庭は本来、子どもにとって真に安らげる「心の居場所」であるべきである。しかし、現状では、親子の間に必要な、心の通い合う信頼関係が希薄化しつつある。つまり、親と子どもが会話をする機会が少なくなっている。子どもが親に相談をしたいときに親は仕事に出ていて家にいない。

また、祖父母との関わりも少なくなってきている。今日では、祖父母の存在が子育てにとって非常に大切だと考えられているが、1970 年代までは、嫁の地位の低さや、祖父母の

孤立、高齢者の自殺率の高さ、尊属殺の多さなど、三世代の問題が繰り返し指摘されていた。子育てに関しても、祖父母による迷信や慣習に基づく育児ではなく、母親が科学的な知識と愛情に基づいて子育てを行うべきだと盛んに説かれた。そうしたことは今や、すっかり忘れ去られたかのようだ。2005 年（平成 17）年版「厚生労働白書」では、『核家族化が進み、従来は祖父母をたよることができていたことができなくなるなど、都市部を中心に家庭で子育てをする母親の孤立化が問題視される。』と述べられている。今の親にとっても、祖父母はもっとも重要な相談相手であり、協力者である。

このように、核家族化はコミュニケーションの低下の要因の一部になっていると考えられる。

第４章　おわりに -理想とするコミュニケーション-

これまでに述べてきたことから、明らかになった今日のコミュニケーション不足の大きな要因は、子どもが話のできる場が少ないことであると考えられる。その場を子どもたちに提供するために我々はどのように作用していけばよいのか。コミュニケーション不足改善に向けて筆者は、次の三点を述べる。

まず一点目に、家庭でのコミュニケーションの充実が必要である。それは、親子での会話やふれあいが充分にできていなければ子どもは、家庭外での人との接し方も分からなくなる。また、様々な発達段階に即したコミュニケーション能力の形成にも大きな影響を及ぼすことにもつながる。ゆえに、生まれたときから、自分が生活している環境である家庭での教育やコミュニケーションの育成は、重要なのである。

二点目に、地域での取り組みが挙げられる。最近、防犯や子どもたちの安全を守るために、地域のお年寄りや保護者の方が一体となって取り組んでおられるところよく目にするようになった。それは、通学路に立って、あいさつ運動をしたり、防犯を呼びかけたりする風景である。あいさつは、基本的なコミュニケーションツールのひとつであると考えられる。地域や近所での関わり合いが淡白になりつつある今日では、朝の登校中や夕方の下校時だけでも、地域の方と顔を合わせることができるということは、子どもたち自身も安心して学校の行き帰りを過ごすことができるのではないだろうか。

三点目に、教育現場でのコミュニケーションが重要である。それには、教師と子ども間、子どもと子ども間、広くとらえるとすれば、教師と家庭間が挙げられる。教師は、一日に保護者と同じくらいの時間を子どもと過ごすことになる。それは、子どもにとって第二の親と言っても過言ではないほどの位置に教師は存在しているからである。また、子どもたちのコミュニケーションの場作りにとって、重要な役割を担うのも教師であると考えられる。勉強を教えるということだけではなく、人と人との関わり合いを子どもたちが深めていけるように導いていくのが、教師という職業であると筆者は考える。

最後に、この論文を執筆することにより、筆者が感じたことを述べようと思う。様々な資料を基にこの論文の執筆を進めてきたが、やはりコミュニケーションの不足はあらゆる

方面から進んでいることがわかった。家庭内や教育現場などの環境の変化、便利になった世の中の現象が、子どもたちのコミュニケーションの場を奪ってしまったということも事実である。我々大人は何をしていかなければならないのか。子どもたちがよりよい未来を築いていくためには、欠かすことができないであろうコミュニケーションの能力を我々は、子どもたちに育んでいかなければならないのではないだろうか。そのために、先ほど述べた三点を実現できるように、様々な方面から子どもたちの思考力や表現力を伸ばしていけるよう、大人が努力していくことが大切であるといえる。この論文を読んで、少しでも賛同していただけたならば、子どものコミュニケーション不足を改善するために、ぜひ実践していただきたいと思う。

参考文献

好きと嫌いの人間関係　～魅力と愛の心理学～　古畑和孝著
自分を見つめる自分　～自己フォーカスの社会心理学～　押見輝男著
人づきあいの技術　～社会的スキルの心理学～　相川充著
「好き」と「嫌い」を心理学してみました　土肥伊都子著
人間関係の心理　吉森護著
対人行動の社会心理学　～人と人の間のこころと行動～　高木修著
家族の人間関係（１）総論　島田一男著
学校の人間関係　島田一男著
学校の人間関係（２）各論　島田一男著
性格と人間関係　島田一男著
新しい人づきあいの心理学　安本美典著
子供が育つ魔法の言葉　ドロシー・ロー・ノルトレイチャル・ハリス著
パーソナリティと対人行動　大渕憲一著
人間関係を学ぶ心理学　杉野欽吾・亀島信也・安藤明人・小牧一裕・川端啓之著

http://www.eonet.ne.jp/~daikyoren/page019.html（『ゆとり教育』とはなに？）
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/16/08/04082302.htm（文部科学省）
http://benesse.jp/vote/voteBackNumber_3154_1.html（Benesse）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo6/gijiroku/001/05041201/001/004.htm（文部科学省）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/chuuou/toushin/9607011.htm（中央教育審議会）
図１ http://www.willcom-inc.com/ja/lineup/ws/papipo